日本医史学雑誌　第64巻第3号（2018）　241–256

白隠禅師の仮名法語にみる「健康」の語の使用
――『於仁安佐美（ヲニアザミ）』（1751）から『さし藻草（モグサ）』（1760）まで――

平尾真智子

健康科学大学看護学部看護学科

受付：平成28年12月13日／受理：平成30年3月16日

要旨：「健康」の語の使用状況を白隠禅師の仮名法語を主に調査した．史料には禅文化研究所編，『白隠禅師法語全集』全14冊（2003）を用いた．白隠慧鶴（1685–1768）は，臨済宗を中興した江戸中期の禅僧である．白隠の仮名法語の9著作『於仁安佐美』巻之上（1751），『於仁安佐美』巻之下（1751），『隻手音声』（1753），『辺鄙以知吾』（1754），『三教一致の弁』（1754），『夜船閑話』巻之下（1755），『夜船閑話』（1757），『仮名葎』（1759），『さし藻草』（1760）の，14ケ所に使用が確認できた．漢文体の語録『毒爪牙』（1758）にも2ケ所の使用があった．「健康」は今日的な身心の健康の意味の他に領地・国にも使用されていた．日本では「健康」の語は1751年より使用されていることが明らかとなった．

キーワード：白隠禅師，仮名法語，健康の語，江戸時代，於仁安佐美

1. 研究目的

「健康」という言葉は医療従事者・教育者などにとって，働きかける対象である人間の心身の状態の目標とする状態であり，保健・医療・看護・教育などの領域にとっては極めて重要な概念の一つである．近年，これらの関係者のなかで「健康」という言葉のルーツが研究課題として取り上げられるようになってきている．

「健康」の語のルーツについて最初に問題提起をしたのは医史学研究者の奥沢康正で，1991年中国からの招聘研究者である厳善炤の「『健康』という語のルーツはどこか」という質問をきっかけに辞典類を調査し，『日本類語大辞典』（明治42年）に「健康」が載っているのをつきとめている[1]．教育史研究者の瀧澤利行は日本における養生思想を原典に基づいて研究し『日本近代健康思想の定立』（1993）において，江戸時代の養生思想が明治以降の健康思想に関連している，と言及している[2]．奥沢の問題提起から，杉浦守邦[3]（1997）や八木保・中森一郎[4]（1999），がこの問題に関する報告を行っている．このなかで杉浦は，幕末期に緒方洪庵がオランダの医学書を翻訳した『病学通論』（1849）に「ヘソンドヘイド」の訳語として「健康」の語が使用されているのを初出としている．一方，八木らは江戸後期の蘭学者，稲村三伯がフランソワ・ハルマの『蘭仏辞典』の蘭語の部分を訳して刊行した蘭和辞典『波留麻和解』（1796）に使用されたのが初出であるとしている．北澤一利は『「健康」の日本史』において（2000），蘭学者の高野長英，緒方洪庵による「健康」の使用について記している[5]．鹿野政直は『健康観にみる近代』（2001）のなかで，明治期になり，福沢諭吉の『文明論之概略』などで「健康」の語が使用されることにより，「健康」が常用語になっていったこと，江戸時代までの日本では「ヘルシー」の状態は，達者・養生・無病・息災・養性・無事・丈夫・強健・元気・壮健などと呼ばれてきた，と述べている[6]．新村拓は『健康の社会史』（2006）のなかで，健康の初出は八木

らの提唱した『波留麻和解』であるとしている[7].

近年の「健康」という語の使用に関する先行研究には，青木純一・北野与一[8]，「健康」の語誌的研究（2007），杉浦守邦[9]，再度「健康」という語の創始者について（2011），がある．このなかで青木らは，白隠禅師の仮名法語『夜船閑話』（1757），序の「健康」の語2ケ所使用を初出としているが，杉浦はこの序の作者は窮乏庵主飢凍という人物であり，白隠とは別の人物の可能性があり白隠自身によるものとは認められないとしている．

白隠禅師の著作は多く，仏教の教義のほかに健康や長寿，病気，看病に関する著作もある[10]．本研究では，「健康」の語の使用に関し，白隠禅師の他の仮名法語や著作を調査し，「健康」の語の使用状況とその日本医学史上の意義を明らかにすることを目的とする．

2. 研究方法

原本影印が収録され，白隠の仮名法語に関する最新の研究成果である禅文化研究所編，『白隠禅師法語全集』[11] 全14冊（1999–2002）を主な研究対象とした．その他に白隠和尚全集編纂会編，『白隠和尚全集』[12] 全8巻（1935）も参照した．

3. 結　　果

1）白隠禅師の人物像

白隠慧鶴（1685–1768）は，臨済宗中興の祖と称される江戸中期の禅僧である．駿河国原宿（現静岡県沼津市原）にあった長沢家の三男に生まれ，15歳で出家し諸国を遊方し修業を続け，病にかかっても内観法で回復し，道鏡慧端の指導で悟りを得た．また禅病を治す治療法を考案し若い修行僧を救った．地元に帰って布教を続け衰退していた臨済宗を復興させた．禅の教えを表した達磨図などの禅画を多数描いた人物である．84歳で遷化．後桜町天皇より神機独妙禅師の諡を賜い，明治17年に明治天皇より正宗国師と追諡された[13].

2）白隠の著作と「健康」の語の使用

白隠の仮名法語に分類される『夜船閑話』などの著作を主に「健康」の語の使用を調査したところ，つぎの9著作14ケ所に使用が確認できた．以下はこれらの著作を「健康」の語の使用の早い順に，（1）から（9）までの番号を付し，白隠の著作名，年代（カッコ内は西暦），使用回数（右端のカッコ内）に表記し，整理したものである．これらの著作には，その著作の簡潔な内容，その著作における「健康」の語の使用箇所（丁数）を抜粋した使用文を提示した．なお文中の「健康」の箇所をわかりやすくするために健康の語には【　】をつけた．

著作の（1）から（9）は仏教の教えをやさしく説いた和文体の仮名法語である．また仮名法語ではないが，白隠の漢文語録である『毒爪牙』にも「健康」の使用が2ケ所認められたため，（10）として取り上げた．

（1）『於仁安佐美（ヲニアザミ）』巻之上，寛延4（1751）年，（3）

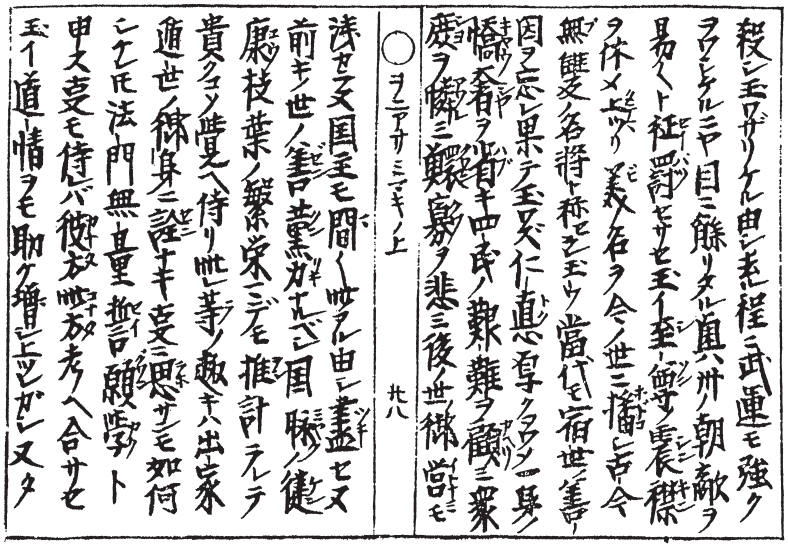
内容は中御門天皇の皇女である宝鏡寺および光照院門跡の姫宮に与えた仮名法語である．姫宮とは京都の妙心寺に立ち寄った時に知り合った後，宝鏡寺に招かれて行った．内容は禅の教義に関するものであるが，富貴を恃み権勢に誇る者への批判，宮門跡の奢侈な日常生活のへの批判，作務と動中の工夫のすすめ，古の出家者や，地獄に落ちた貴人，禅病の体験談などである．

①『於仁安佐美（ヲニアザミ）』巻之上，二八丁ウ[14]

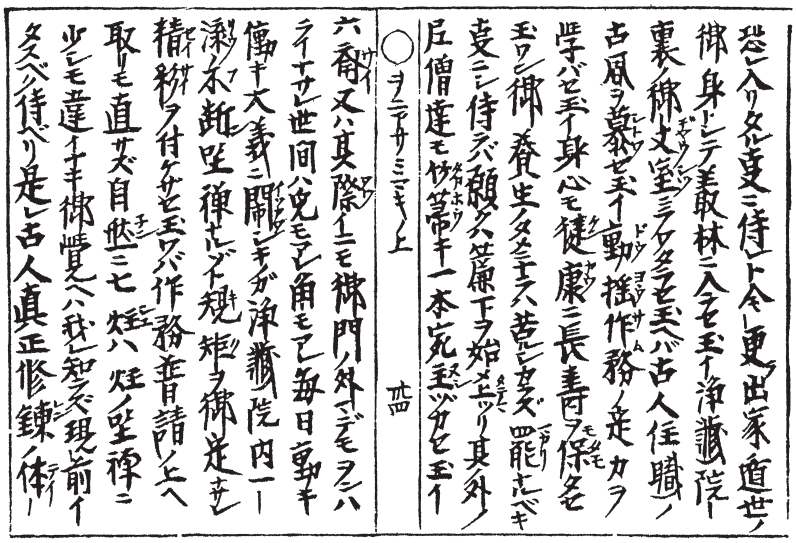
「盡（ツキ）セヌ前（さ）キノ世ノ善薫力（ゼンクンリキ）ナルベシ．國脉（ミヤク）ノ【健康（ケンコウ）】，枝葉（えだは）ノ繁榮マデモ推計（ヲシはか）ラレテ貴クコソ覺ヘ侍リ．」（資料1）

②『於仁安佐美（ヲニアザミ）』巻之上，三四丁オ[15]

「恐レ入リタル事ニ侍レド，今更（いまさラ）出家遁世ノ御身（おんみ）トシテ，叢林ニ入ラセ玉イ，淨藏院裏ノ御丈室（ヂヤウシツ）ニテワタラセ玉ヘバ，古人住職ノ古風ヲ慕（シトワ）セ玉イ，動揺作務（ドウヨウサム）ノ定力（じようりき）ヲ學バセ玉イ，身心モ【健康（ケンカウ）】ニ長壽ヲモ保（タモ）タセ玉ワン御養生ノタメニナラバ苦ルシカラズ．」（資料2）



資料1　『於仁安佐美』巻之上，二八丁ウ



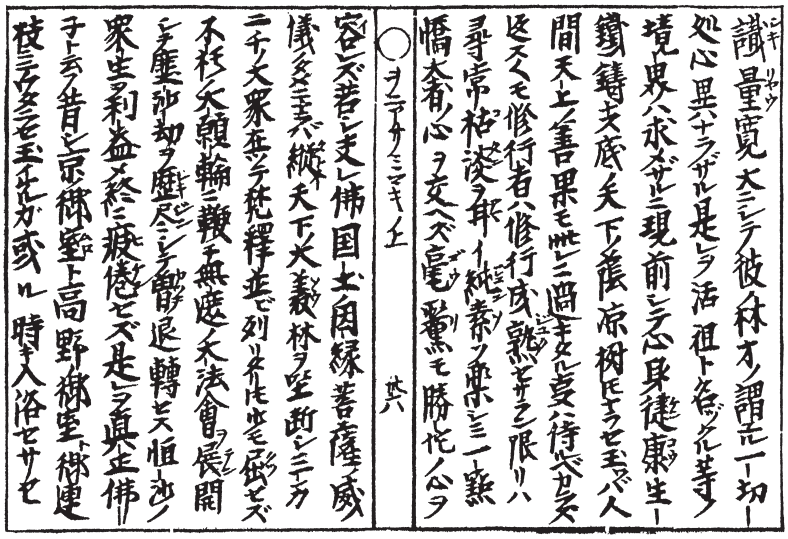
資料2　『於仁安佐美』巻之上，三四丁オ

③『於仁安佐美』巻之上，三六丁オ[16]

「彼ノ林才ノ謂ユル，一切處心異ナラザル是レヲ活祖ト名ヅクル等ノ境界ハ，求メザルニ現前シテ，心身【健康】，生鐵鑄ナス底ノ天下ノ蔭涼樹トモナラセ玉ワバ，人間天上ノ善果モ此レニ過ギタル事ハ侍ルベカラズ.」（資料3）

(2)『於仁安佐美』巻之下，宝暦2（1752）年，(1)

本書は『於仁安佐美』巻之下，となっているが『於仁安佐美』巻之上との内容的関連はなく独立した一書の書簡である．内容は伊予大洲藩江戸詰家老，加藤内蔵之輔成章に与えた仮名法語である．大洲藩では財政難からしばしば倹約令が出され，藩士の生活も最低限に切り詰められていた．寛延3（1750）年には藩内の1万8千人の農民が



資料3　『於仁安佐美』巻之上，三六丁オ

蜂起する「内ノ子騒動」が起きている．当該箇所は書簡の冒頭部分である．

『於仁安佐美』巻之下，一丁オ[17]

「十月十八日ノ貴書，并ニ兩種，昨十五日落手，寔ニ對顔ノ心地，怡悦淺カラズ候ロ．殿下増ス増ス御【健康】ニ，諸君無難ニ御勤メノ由シ，珍重ノ至リニ候ロ」

(3)『隻手音声』，宝暦3（1753）年，(1)

内容は前岡山城主の侍側の女性，富郷賢嫫に与えた仮名法語である．禅の教義について説いている．見性を得て仏国土を実現することが大事であることを説き，後半では中国の堕落した禅を批判している．当該箇所は書簡の冒頭部分である．『隻手音声』とは白隠禅師の公案によるもので「片手の音を聞くことの意味」を問うものである．

『隻手音聲』（一名，藪柑子）一丁[18]

「卯月二十七日の御文，五月初めに落掌．貴命之通，過し頃は法雲精舍に於て圖らざる見參，怡悦淺からず令存候．其後，大侯隱君，其外，何れも恙なく御歸城，増御【健康】の旨，珍重此御事に候」

(4)『辺鄙以知吾』巻之上，宝暦4（1754），(2)

内容は岡山藩主池田継政への書簡の形をとる仮名法語である．仁政と養生のすすめを説き，暗君は酷使を重用する，村役人の専横と百姓の蜂起，家康公の善政を記す．華奢を禁じ，浮費を制して民をあわれみ恵むことが第一の徳業となる．参勤交代の大名行列を批判し，その膨大な費用は結局百姓のつけになるとした．御政道を批判したことで，幕府により禁書となる．当該箇所は書簡のはじめの部分である．

『邊鄙以知吾』巻之上，五丁ウ[19]

「民肥へ國ゆたかなる，是を強國と云ふ．強國の主として，王位を守護せんとならば，先須らく身財【健康】に壽算延長なる事を計るべし．若夫多病短壽ならばか，何の暇有てか帝都を守護し，邦家を治め，生民お愛顧する事を得んや．身財【健康】，長壽を得んとならば，飲食を節にし，人欲の私を制して，養生の至要を求むべし」

(5)『三教一致の弁』，宝暦4（1754）年，(2)

某居士に与えた宗教の根本に関する仮名法語である．内容は禅，浄土，老荘，神道の根本原理は共通しており，「至善」にあるとするものである．

①『三教一致の辯』[20]

「今歳古稀の馬年を歴れども，身材【健康】，心神勇猛，氣力は次第に二三十歳の時にまさりて，平生を輕快すといへども，少しも以て足れりとせず，常に四弘の誓願輪に鞭うつて飽くことなし.」

②『三教一致の辯』[21]

「居士の如きは宿福優かにして，一郷の長家に主として，人望も厚く，聲價もまた高く，耳順從心の齡を經れども，身體【健康】に壽山繁茂して，萬事心にまかせ，一郷の善士と稱せられて，吉凶榮辱，飽くまで經つくし給ふ事は，前生多生［少］宿善の致す所ならずや.」

(6)『夜船閑話』巻之下，宝暦 5（1755）年，(1)

駿河小島藩主松平昌信に与えた書簡の形をとる仮名法語である．主題は，奢侈を禁じ浮費をおさえ，佞臣を遠ざけ賢臣を重用して善政を施せという政事指南である．藩主を補佐する重臣の名前を具体的に出して，重用すべきであると提言している．白隠の内観法を説いた『夜船閑話』と同じタイトルであるが，内容は何の連絡もない，まったくの別物である[22].

『夜船閑話』巻之下，五丁ウ[23]

「浮費を制し，節儉を守り，枯淡を喫して，自家の餘分を與へて以て黎民を惠まば，謂つべし，仁政なりと．其澤，兒孫に傳へて，國脉必らず【健康】ならん.」

(7)『夜船閑話』，宝暦 7（1757）年，(2)

白隠の仮名法語のなかでもっとも代表的なものとされる．若い白隠禅師が禅病に悩んでいた時，人から教えられて，京都白河の山中にいた白幽子を尋ね，内観の法を伝授されたという経緯を記し，内観の法と軟酥の法を述べたもの．序と本文からなるが，当該箇所は序の部分である．序の作者は窮乏庵主飢凍，となっている．

①『夜船閑話』序文，一〇丁オ[24]

「至人の云く，此は是神仙長生不死の神術なり．中下は世壽三百歳なるべし．其餘は計り定むべからず．予則ち歡喜に堪へず，精修怠らざる者大凡三年，心身次第に【健康】に，氣力次第に勇壯なる事を覺ふ」

②『夜船閑話』，序文，一二丁ウ[25]

「終に一日も罷講齋を鎖さず．身心【健康】，氣力は次第に二三十歳の時には遙かに勝されり．是皆彼の内觀の奇功に依る事を覺ふ.」

(8)『仮名葎』（ちりちり草），宝暦 9（1759）年，(1)

内容は唯一神道を批判するもので，甲府芝宮で唯一神道を主張する神主の遠江をさとすものである．両部神道がよい，とする．廃仏を説いた者，唯一神道を始めた者たちの因果応報の例をいくつもあげる．神と仏の違いはあっても，ただ水と波の違いであり，本来は同じものであると説く．

『仮名葎』（ちりちり草），三三丁オ[26]

「其上，村中も次第に繁榮し，氏子共まで益々【健康】に少しの病難も無き事，是皆神事も祭禮も神慮に契へる驗るしならずや.」

(9)『さし藻草』，宝暦 10（1760）年，(1)

内容は某侯殿下近侍の求めに応ずる書で，第一に，養生し長寿を保ち善政を行うことを勧める．養生のためには女色が第一の禁物であるので大奥の女性の数を減らし，倹約につとめなければならない．第二にこの世に高貴な身分に生まれたのは宿善の結果であるが，その身分に奢っていればまた必ず三途に堕ちることになる．得がたき人身に生まれたのだから，菩提心をおこして菩提を求めよと説いている．

『さし藻草』巻之一，一四丁オ[27]

「帝，深く其意を感じ玉ひ，即日，群臣に命じて，宮女三千，同時に放逐し玉ふと．希有なる哉，玉體，日あらずして快復ましまし，次第に【健康】にして，仁政，萬民を救ひ，德功，四海を蓋ひ玉ひけるとぞ．寔に貴ぶべし.」

（10）『毒爪牙』，宝暦12（1762）年，（2）

『毒爪牙』は白隠の代表的漢文語録『荊叢毒藥』（1758）[28]の拾遺文『荊叢毒藥拾遺』に付されている三丁ほどの短文の語録である．内容は，「碧巌録」に真仏屋裡の語なし，ということの論議である．この『毒爪牙』の末尾の文章につぎの「健康」の語を使用した2箇所がある．

『毒爪牙』，三丁ウ[29]

①（漢文）

「傍僧曰，古来禅門之緇侶，有賢愚有利鈍，【健康】長寿如麻似粟．那箇是被奪却命根底．寔可怪」

（読み下し文）

「傍僧曰く，古来，禅門の緇侶，賢愚有り，利鈍有り，健康長寿，麻の如く粟に似たり．那箇か是命根を脱却せらるる底．寔に怪しむ可し」[30]

②（漢文）

「窮乏道者曰，你輩【健康】長寿，縦閲三百五百歳時，不窮明者般向上宗旨，総是鴉亦不顧底屍臭皮，堪作何用．其顧焉」

（読み下し文）

「窮乏道者曰く，你が輩，健康長寿．縦い三百五百の歳時を閲するも，者般向上の宗旨を窮明せずんば，総の是れ鴉も亦顧みざるの底の屍臭皮，何の用を作すか堪えん．其れ焉を顧え」[31]

4. 考　　察

1）白隠の仮名法語にみる「健康」の語の使用

（1）「健康」の語が初出した『於仁安佐美』巻之上，（1751）

白隠禅師が寛延・宝暦期に著わした10著作16ヶ所に「健康」の語の使用が確認された．この10著作のうち，9冊は仏教の教えをわかりやすく説いた「仮名法語」といわれる著作であり，他の一冊は漢文体の語録であった．

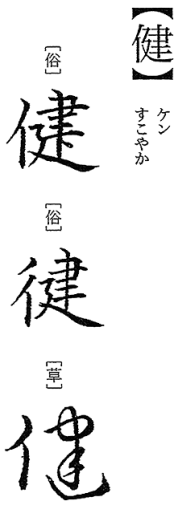
仮名法語のなかでは，白隠禅師が中御門天皇の皇女である門跡の姫宮に与えた法語『於仁安佐美』巻之上，（1751）での使用が早かった．

（2）白隠が使用した「健康」の字体

白隠の今回研究対象とした著作において，健康の「健」の字は3種類の字体が使用されていた．「健康」の語を使用している9冊の仮名法語の原本影印には，白隠独自の「健」の字が使用されていた．最新の『日本難字異体字大事典』（2012）[32]によると，人部8–9画の「健」の字の異体字には，「俗字」が二つと草書体が一つの三つが掲載されている（資料4）．白隠の独自の「健」の字は，この事典の二つの俗字の，最初の「健」の俗字の「にんべん」の「つくり」の部分に，2つ目の俗字のへんである「ぎょうにんべん」を合成したような字体となっており，「健」の字の俗字の範疇を大きく逸脱するものではなく，俗字の一種と考えることができる．草書体の使用は確認できなかった．

異体字とは『広辞苑』によると，漢字や仮名の標準字体以外のものをいう．ただし，同字認識には，時代や位相，社会的，あるいは個人的な認識によって大きな差があり，その認定はむずかしい，とされており[33]，この大事典に現時点では未掲載であっても，今後さらに新たに発見される可能性が残っている．白隠の独自の健の字はまだ発見されていない異体字である可能性がある．

10番目の漢文体の『毒爪牙』には「ぎょうにんべん」の「健」の字が2ヶ所に使用されており，



資料4　「健」の異体字（俗字2，草書体1）

① 健

② 健

③ 健

資料5　白隠の使用した3種類の「健」の字

これは前述の『異体字事典』に「異体字」として取り上げられている俗字の2つ目に該当する字体であった．白隠の仮名法語『壁生草（いつまでぐさ）』（1766）は最晩年に書かれた自伝で，後半部には漢文体の『夜船閑話』が掲載されており，「健康」という語の使用はみられないが，「健」の字一字での使用ではあるが，そこには今日的な標準的な「健」の字が使用されていた[34]．このことから，白隠の使用した「健康」の「健」の字は，①白隠独自の「健」の字，②ぎょうにんべんの「健」の字，③標準的な字体の今日的な「健」の字の3種類となる（資料5）．

（3）白隠が使用した「健康」の語の文脈からみた意味

白隠の「仮名法語」における使用例14箇所では，「健康」は，国脈の健康（2），身心健康（2），心身健康（2），御健康（2），身財健康（2），身材健康，身体健康，益々健康，玉体健康，となっている．14箇所のうち，7箇所において「健康」は身心，身財，身材，身体，玉体，というように心よりも実質的な「身・からだ」を優先している使いかたをしており，心を先に使用した心身への使用は2ケ所であった．他の3ケ所は御健康，益々健康のように両者を区別した使用はしていない．また2ケ所は「国脈」に使用していることから，藩主の治める領地や藩主自身の家系の維持・継続の意味にも使用されている．さらに漢文体の語録においては「健康」と「長寿」とセットで使用していることがわかる．

白隠の仮名法語の6著作『遠羅天釜』『布鼓』『夜船閑話』『八重葎』『歓発菩提心偈』『壁生草』においては形容詞の「健（すこ）やか」が14箇所ほど使用されている．また「健康」と同様の意味で「堅剛」[35]という語も使用していた．「健康」のふりがなは，「ケンカウ」が5回，「ケンコウ」が3回，ふりがなが付されていないものが6ケ所であった．このことから読み方は今日と同じ「けんこう」であることがわかる．

野村瑞城は，『夜船閑話』の全文と現代語訳，註釈を記した自著のなかで，「序文と其の意味」の小項目の現代語訳のところで，「師は是等の参禅者を救うべく健体康心の秘訣たる内観の法を授けられた」というように訳している[36]．つまり，「健」は「体」を修飾し，「康」は「心」の修飾に用いている．「健康」をこのように理解するならば，身体が先にきて心はあとにくる用語であることがわかる．このことについて，青木は国語辞典を各種用いて，「健」は主に身体的な意味に，「康」は心のほうに用いられるとしている[37]．

2）白隠の仮名法語の禅宗史における位置づけ

白隠の著作は多方面にわたり，自筆の文書は50種を数える．漢文体の語録，古典の講義や著語からなる提唱録，漢文体の自叙伝，和文体の「仮名法語」，俗謡風の説教などがあり，他に書簡，墨蹟，禅画などもあり，超人的ともいえる著作活動を行っている．

今回研究の対象とした「仮名法語」とは，かな（和文）で記された仏法の道理を示した語である．元来，禅は中国からもたらされ，禅文化の土台となっているものは漢文表記である．仮名法語は中世から近世にかけて流行した．仮名法語の著者は華厳宗，法相宗，真言宗，時宗，禅宗などほとんどすべての宗派にわたるが，そのなかでも多くの仮名法語を著したのは禅宗系統である[38]．

江戸時代になっても庶民に漢文の素養のある者は少なかったため，庶民に禅を説くには和文で記された「仮名法語」が必要とされた．「仮名法語」

は白隠の発明というわけではなく，古来より，夢窓疎石，抜隊得勝，一休宗純などの高僧が著しているが，白隠の仮名法語は量の点で先人たちを凌駕している．そのため「仮名法語」といえば白隠というイメージが強くなっている[39]．

（1）鈴木大拙と白隠の仮名法語

禅の研究者鈴木大拙（1870–1960）は，白隠をシナ禅を日本化した大功績者であるとし，今までにも仮名法語というものもあったが，文字を大和風にしただけでその精神には尚シナ臭味があった，ところが白隠に到りては禅がその文字においてのみならず，その精神においても日本化してきたというべきである，と記している．

また，白隠の文字は漢文字であるが，その気分は全く日本的で，日本人の性情に適していると思うこと，公案を設けるにも著語をするにも，法語を出すにも，提唱をするのにも，シナを真似するではなく，日本人がやっている禅として禅を取り扱っているように見えること，白隠以前にありては，まだシナの禅を学んでいるという感じが抜けていないかしらんと想はれるが，白隠になると禅は元から日本のものであったというような心持がでること，即ち禅が吾が物となってきた，と記している．さらに白隠は通俗禅の鼓吹者であったこと，この時代には禅がいわゆる知識階級にのみ限るべきものでないという社会意識が一般にあったのかも知れないこと，白隠は禅の俗間に流布せられんことを期したこと，白隠の通俗禅の鼓吹は民間との本当の接触にみるところがあったといわれないだろうか，と述べている[40]．

（2）秋月龍珉と白隠の仮名法語

禅研究者の秋月龍珉（1921–1999）は白隠の多数の仮名法語作品の出現に対し著書『白隠禅師』[41]のなかで，江戸初期の関東の革新的な雰囲気の中で新しく起こってくる庶民階級の禅として，「在家禅」といってもいいと思うが，そういう日本仏教の近世のプロテスタントというか，宗教改革の一環として，「白隠の禅」を捉えていくことが大事だと思う，と述べ，白隠の禅が仮名法語という面で，庶民階級の中に延びていったのもここにその源があると思う，その背後に白隠の「闡提（せんだい）思想」があり，これが「白隠禅の本質」に関わる大事である，と記している．闡提とは仏性を有たない人のことで小乗仏教ではこれを「凡夫の闡提」といって認めている．それに対し大乗仏教では，「菩薩の闡提」ということを言い出した．慈悲心のあまりに無限の衆生を成仏させようとして，無限の衆生が成仏するまでは「私一人成仏しない」という「願」に生きる心を，「菩薩の闡提」思想というのである．白隠の師家としての室号は「闡提窟」という．

（3）白隠の願心――長命，健康，養生

白隠は『辺鄙以知吾（へびキチゴ）』[42]や『夜船閑話（ヤセンカンナ）』巻の下[43]，『さし藻草（モグサ）』[44]などにおいて，為政者（藩主・大名）は仁政・善政を行うのには健康と長命が必要であると考えていた．白隠の禅画のなかには長寿であることを願って描いたと思われる『百寿図』が残っている．また白隠の禅画に登場する『お福お灸』や『お婆々どの粉引歌』に描かれているお福さんの着物の模様や『布袋解開』の布袋の着物に「寿」の字が描かれ，『鼠大黒』や『蛤蜊観音』の禅画のなかにも「寿」の字が描かれている．「寿」は「いのちながし」と読む．さらに白隠の『延命十句観音経』には，本来の『十句観音経』にわざわざ「延命」の二字が付されている[45]．これらのことから，「長寿」は白隠の真の願心であることがわかる[46]．その一方で，同年代に著された漢文体の語録『毒爪牙』においては，最終的には健康・長命よりも仏の教えを知ることのほうが大事である，と結論づけている[47]．

「健康」に類似し「健康」よりも古くから用いられている「養生」の語については白隠の「仮名法語」のなかで約30ヶ所に使用されている[48]．両者の違いについて考えてみると，『辺鄙以知吾（へびキチゴ）』[49]のなかに「身財健康，長寿を得んとならば，飲食を節にし，人欲の私を制して養生の至要を求むべし．養生の至要は，良医を近づけ，内観と信力を並べ備へて武運を養ひ玉ふべし」とあることから，「健康」は身体の状態を表し，「養生」は「生

を養う」という身体の動作を表していると考えられる．さらに「身財健康に寿算延長なる事」に対し「多病短寿ならば」と対句となっていることから考えれば，「身財健康」と「多病」は反対語と考えることもできる．つまり，「健康」を病のない身体の状態ととらえているのである．

また『於仁安佐美』巻之上の注において芳澤は，「養生」には「生命力を養い心身の健康を増進し精進すること」と記しており，養生とは動作を伴うものととらえている[50]．このことから，「健康」は養生が目的とする状態であることがわかる．

(4) 白隠が「健康」の語を用いた仮名法語を著した寛延・宝暦という時代

白隠が「健康」の語を使用した仮名法語を著したのは寛延4年の『於仁安佐美』巻之上を除いて，すべて宝暦年間のことである．『於仁安佐美』巻之上も宝暦と改元される年の著作であることから，宝暦期を主体に考えてもよいものと思われる．

この宝暦期は江戸時代の時代区分でいうと徳川吉宗による享保の改革の終盤期と田沼時代のちょうど中間期にあたる．将軍は第9代の徳川家重（在位 1745–1760）である．江戸時代中期においてもっとも百姓一揆が発生したのが1750年前後であり，特に「郡上宝暦一揆」（1754）は大きなものだった．この時代の百姓一揆はいわゆる「惣百姓一揆」といわれるもので，村役人や百姓が領主や藩主に対し，新税撤回や専売制廃止を要求して行われるものであった[51]．

白隠のこの時期の仮名法語のうち，『辺鄙以知吾』や『夜船閑話』巻の下，『さし藻草』は藩主に対し仁政を行うことを説いている法語であることから，白隠もこの時代の影響を受けているといえよう．『白隠―江戸の社会変革者』を著した高橋敏はそのなかの「宝暦・明和期の白隠」の章で，この時期に「姫路藩寛延大一揆」や「郡上藩宝暦騒動」，「岡崎藩水野家」「加納藩安藤家」のお家騒動，京都の竹内式部の尊王事件，倒幕思想の先駆けとなる山県大弐の放伐論などの白隠の周辺に起こった事件を取り上げている．白隠の『辺鄙以知吾』はその激烈な政治批判のために禁書となった．白隠は明和年間に駿河小島藩で起こった惣百姓一揆にも関与していた可能性も指摘されており，幕政・藩政への批判が生じた時代であった[52]．

また秋月は禅宗史的にはいわゆるプロテスタントの登場であり，宗教改革ともいえる時代であったと捉えている．

3）日本史における「健康」の語のルーツ

(1) 漢語辞典にみる「健康」の語のルーツ

『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』（2007）において編集者佐藤亨は，「健康」の項目[53]を設けている．そこには①「Health, s. 健康，安全」の出典として，『英和対訳袖珍辞書』（堀達之助ら・文久2年 1862）が例としてあげられている．この項目の「意味・出自」の解説には，「健康」は幕末期に英語の health の訳語として成立した．それより以前は「康健」で中世からみえる，とし正平元年（1346）『宝覚真空禅師録』が出典としてあげられている．近世では貝原益軒『養生訓』（第2巻）に「年わかく康健なる時よりはやく養うべし」とある．中国では「康健」は唐代の詩人白居易の詩にみられていて，漢籍に典拠がみられるものの「健康」の語はみない，としている．清の時代のイギリス人中国学者 James Leggs の『智環啓蒙塾課初歩』（1865）に「health 康健」とあり，後代においても中国では「康健」が用いられていた，とある．

『日本国語大辞典』第2版（2001）では「健康」の項目では，健康の用語の使用例の最初として，福沢諭吉の書籍『西洋事情』（1866，1870）が例文としてあげられている．

(2) 国語学からみた「健康」のルーツ

「健康」という語に関する研究には，国語学からの研究も行われている．「健康」の語源を研究した荒川清秀によると，「健康」は中国起源ではないという．「健康」が日本製の漢語であることを証明するために，19世紀の英華辞典に「健康」という語が取られているかを調べてみると，health の訳には「康健」が当てられているだけで「健康」は出てこない．19世紀の英華辞典に出て

こないということはまず，中国製ではないと考えてよい，としている．

また「健康」は「康健」をひっくりかえしてつくられた，「健康」は中国人より日本人につくりやすいパターンに属する例であるという．複合語で意味のうえから原因が捜し出せない場合，中国語の場合には二つの字は声調（四声）の順に並ぶ傾向が強いという．「康健」は声調の順に並んでいるが，「健康」はそうではない，という．

「健康」「康健」のような字順を逆にした語については，日本の国語学界では早くから注目されていて，すぐれた研究が行われている．複合語の場合，多用のもの，意味の優勢なものが前にくるという場合がある，という．以上のことから国語学者の荒川は「健康」は日本人による造語である可能性が高いと指摘し，もとあった「康健」に新しい意味，役割をもたそうとして「健康」とひっくりかえしたと考えたい，と述べている[54]．

（3）日本史史料のデータベースからみた「健康」のルーツ

日本史史料に関するデータベースを用いた「健康」の語の検索として，東京大学史料編纂所のデータベースによる検索[55]では，全文の検索に用いられる「奈良時代古文書フルテキストデータベース」「平安遺文フルテキストデータベース」「鎌倉遺文フルテキストデータベース」「古記録フルテキストデータベース」「古文書フルテキストデータベース」などに「健康」の用語に該当するものはなかった（2016.2.14アクセス）．

日本史上のできごとを主題とした「大日本史料総合データベース」「近世史編纂支援データベース」にも「健康」の用語に該当するものはない（2016.2.14アクセス）．約10万件の史料を検索できる「近世編年データベース」では『慶安二年の御触書』『加賀藩文書』の2件検索されるが，史料の原文ではなく解説文による使用であった．

史料の所在を検索する「所蔵史料目録データベース」では室町時代の『三条西実隆公記』が検索されるが，こちらも史料に対する現代語による解説文による使用であった．また「日本古文書ユニオンカタログ」では『萩藩文書』『東福寺文書』の2件検索されるが，こちらも前者は史料原文ではなく解説文による使用であり，後者は中国の地名の「建康」であり，「健康」の用語に該当するものはなかった（2016.2.14アクセス）．これらのことから，日本史史料としての幕府や大名家，寺社などによる行政・経済関連の文書には「健康」の語の使用がみられないことが判明した．

（4）日本古典籍・百科事典・古語辞典・仏教辞典からみた「健康」のルーツ

『国書総目録』を「健康」で検索すると『健康理学』（東京大学図書館所蔵）が掲載されている．本書は明治維新期のお雇い外国人で医師であるボードウィンによる明治3年の「医学所」での生理学の講義内容を翻訳した手書きの書である[56]．

国文学資料館の「日本古典籍総合目録データベース」は『国書総目録』を引き継ぐ形のもので「健康」の検索で『健康理学』『健康書』の2件検索される．『健康理学』は前述の明治期初期のもので，『健康書』は表紙のない史料に対する後世の目録作成者による表題の命名であったことが確認できた．

明治初期に編纂された最初の百科事典ともいえる『古事類苑』[57]（全51巻）は上代から近世末までの日本のあらゆる分野の事項を解説しており，日本史史料の重要な文献である．国際日本文化センターによる「古事類苑データベース」では「看病」「養生」の用語は検索されるが，「健康」の用語には該当がない．

日本の古典文学作品の語彙を理解するための用語で，上代から近世末までの作品に用いられた用語に関する辞典として，『角川古語大辞典』[58]（全5巻）がある．この辞典に「健康」の語は収録されていない．このことから，上代から近世末以前の古典文学作品に「健康」の語は使用されていないことがわかる．最後に代表的な仏教用語辞典である『望月仏教大辞典』[59]には「健康」の用語は未掲載であり，仏教用語としてはとらえられていない．

以上のことから，上代から近世末までの政事関連の史料，医学書を含めた総合的な古典籍の書籍，古典文学作品，仏教書という広範囲な分野の文献に，「健康」とタイトルのつく書や「健康」の用語は検索されないということが判明した．

4）白隠『夜船閑話』（1757）の普及と「健康」の語の普及

（1）白隠の門人，在家信者，白隠自身による『夜船閑話』の普及

白隠の仮名法語は特定の信者や藩主・大名，門跡などに与えた書簡の形で残っているものが多いが，『夜船閑話』だけは健康法として広く庶民に普及した．『国書総目録』[60] で『夜船閑話』を所蔵している図書館や資料館が全国で23と他の文献よりも多いことから，かなり普及していたことがわかる．

白隠には東嶺円慈，遂翁元慮，峨山慈棹，大休慧昉の四大高弟を初め，80人近くの直弟子がいたという[61]．このうち，東嶺は剣術の寺田に参禅錬丹の術を教えており，これらの弟子をとおして白隠の調息法が広まったことも想定される．また松蔭寺の周囲や近隣地域には在家の信者も多く，彼らは鵠林教団を形成していた[62]．また同じ禅宗で曹洞宗の良寛（1758–1831）も越後で『夜船閑話』を読み養生していたことが知られている[63]．

白隠の歩いた距離を研究した渡邉義行によると，84年の生涯でその距離は1万2千キロにもなるという[64]．この移動は晩年は籠を利用したようであるが，多くは徒歩によるものである．『夜船閑話』が刊行されたのは白隠74歳の宝暦7（1757）年で，入寂する84歳までの10年間に講話・講演などで訪れた寺院数は約92ケ所にもなる[65]．このように白隠は各地の寺から講師として招聘されており，その際，土産として『夜船閑話』を持参した可能性もある．

白隠はまた今日の呼吸法による健康法の元祖とされ[66]，明治になってからも19年『白隠禅師夜船閑話』（宝暦7年版の復刻，和書）が京都の貝葉書院から印刷出版されている．

（2）国学者，武道家，医者による『夜船閑話』の普及

仏教学者である鎌田茂雄の「白隠禅師の調息法及びその継承と発展」という論考には，江戸時代後期の国学者平田篤胤（1776–1842）が自身の著作『志都乃石屋』[67] のなかで白隠の『夜船閑話』を読み，彼の調息法を健康法に取り入れていることが記されている．篤胤の江戸の塾「気吹舎」の門人は天保期で370名，天保末には500名を超えており，門人は江戸近辺から上総・下総を中心としながら，遠江，三河，備前，備中，伊予，越後，陸奥，出羽など，東西の遠方地域まで及んでいた，という[68]．

白隠の『夜船閑話』にみられる調息法は武道にも取り入れられた．江戸時代後期の武道家，兵法家，天真白井流で有名な白井鳩洲（白井亨 1783–1843）の師は寺田五右衛門宗有（1745–1835）である．その寺田は白隠の弟子の東嶺により参禅錬丹の術を受けたという．寺田は参禅錬丹の術に兵法を加えて独自の呼吸法を生み出した．白井は心法による剣術を理想とし，白隠が『夜船閑話』等に記した内観法を行い錬丹を重視した．白井には『兵法未知志留辺』などの著作がある．白井の武道・兵法を受けた者は，勝海舟をはじめ百人余りに及んだという．また江戸時代後期の町医者平野重誠は著書『養生訣』のなかで呼吸法について述べているが，平野はこの白井から呼吸法を学び，医術の助けとしたのである[69]．この呼吸法は平野の『病家須知』にも記されている．

平田篤胤の門人や白井鳩洲などの武道家，平野重誠などの町医者による呼吸法の採用をとおして，白隠の『夜船閑話』の内容である呼吸法は明治期まで伝えられた可能性がある．

5. 白隠禅師の仮名法語にみる「健康」の語の使用の日本医学史上の意義

白隠禅師が寛延・宝暦期に著わした10著作16ケ所に「健康」の語の使用が確認された．そのなかで，白隠禅師が中御門天皇の皇女である門跡の姫宮に与えた法語『於仁安佐美』寛延4（1751）年での使用が早かった．「健康」の語は江戸中期

の仏教者，白隠禅師の「仮名法語」等の著作で主に身体の健康の意味で随所に使用されており，その使用は1751年まで遡ることが明らかとなった．

「健康」の語の表出された時代は百姓一揆が多発した宝暦期で，幕府や藩の政事に対する「批判精神」の台頭した時期と重なっている．このような「批判的精神」を背景にこれまで用いられてきた中国由来の「康健」ではなく，意味的に身体の「健やか」を優先し，字順を逆にした日本語としての「健康」が創出されたのであろう．新しい価値観による世相・社会を背景に白隠の仮名法語，それに伴う「健康」の語が登場してきたと捉えるべきであろう．白隠は善政を行う為政者には健康・長寿が必要であると訴えている．また国脈という文脈で「健康」の語を使用していることから，藩主の領地の維持，藩主の家系の維持の意味合いを持たせていることがわかる．この願心から，従来からある中国語の「康健」を逆にし，まずは身体的な強さを優先した「健康」の用語を造語したといえる．

これまでの日本医学史研究書において，江戸中期における白隠禅師の仮名法語における「健康」の語の使用は，医学史の一分野として全く位置づけられてこなかった．医史学研究者の富士川游は『日本医学史綱要』[70] のなかで，太古の医学から江戸時代までの医学史を通史として記述している．そのなかに「養生科」に関する記載はあるが，「健康」に関する記述はみられない．また白隠の「健康」の用語の使用は江戸時代中期に生じた事実であるが，江戸時代の代表的な医学史書である服部敏郎の『江戸時代医学史の研究』は，江戸時代医学の概観，儒学と医学，国学と医学，蘭学と医学，庶民文芸と医学，江戸時代著名人の病気，江戸幕府の医官について，の七章で構成され，白隠は「儒学と医学」の章の「第3節　儒学者の医学観」の「第5項　貝原益軒」の「3　養生訓と夜船閑話・志都能石屋」で取り上げられている．しかし，ここでは長寿・健康を保つ道を説いた書として『夜船閑話』は紹介されてはいるが，「健康」そのものをタイトルにした見出しとはなっていない[71]．さらに近年では青木歳幸の『江戸時代の医学―名医たちの三百年』がある．このうち，第二章江戸前期―古方派の成立の，中項目の3は養生への関心，となっており，『養生訓』と貝原益軒の小項目となっている．また第三章江戸中期―実証的精神の成長，のなかの8つの中項目はそれぞれ 1. 享保の改革と医学，2. 本草学と医学，3. 古方派の新展開，4. 庶民とともに生きる医師，5.『解体新書』の時代，6. 蘭学の興隆，7. 解剖の広がり，8. 医学教育の新展開，となっており，「健康」に関する項目は見あたらない[72]．

以上のことから，従来の日本医学史は，医学と病気そしてその治療の側面の歴史的変遷に重点をおき，健康の側面には養生以外に注意を向けてこなかったといえよう．今回の研究による江戸時代中期における白隠禅師の仮名法語における「健康」の語の使用は，日本医学史のなかの江戸時代に医学の一分野として，「養生」とは別項目として位置づく価値があることが明らかになった．白隠禅師による「健康」の語の使用は，日本医学史上に「健康」の用語の初出として，明確に位置づけられる必要がある．

謝　辞

本研究にご協力いただきました前花園大学国際禅学研究所の芳澤勝弘先生に深く感謝いたします．

本研究は2014年度武田科学振興財団杏雨書屋研究奨励研究の一部である．

本稿は，第117回日本医史学会（2016）で発表した同名の演題の内容をもとに加筆したものである．

参考文献及び註

1）奥沢康正．「健康」という語のルーツさがし．京都医報 1991；第1359号：8–10

2）瀧澤利行，近代日本健康思想の定立，東京：大空社；1993.

3）杉浦守邦．「健康」という語の創始者について．日本医史学雑誌 1997；43(2): 249–254

ここで杉浦は緒方洪庵の翻訳書『病学通論』（1849）を「健康」の初出としている．

4）八木保・中森一郎．用語「健康」の由来を求めて．保健の科学 1998；40(10): 841–846．八木保・中森一

郎．同（第2報）．保健の科学 1999；41(8): 633–638 八木保・中森一郎．同（第3報）．保健の科学 1999；41(12): 950–955　このなかの第3報で，稲村三伯が13年をかけて編集した『波留間和解』（通称『江戸ハルマ』）（1796）という蘭和辞書にみられるのが「健康」の初出である，と結論づけている．また，八木は，「健康」という語の起源とその流布について．保健の科学 2001；43(8): 665–670 という論考もある．

5）北澤一利，「健康」の日本史，東京：平凡社新書 068；2000.

6）鹿野政直，健康観にみる近代，東京：朝日選書 674；朝日新聞社；2001.

7）新村拓，健康の社会史―養生，衛生から健康増進へ，東京：法政大学出版局；2006.

8）青木純一・北野与一．「健康」の語誌的研究．東横学園女子短期大学紀要 2007；41 号：1–16

青木純一氏は教育学者で，教育学関係の他に『結核の社会史』（2004）などの著作がある．

9）杉浦守邦．再度「健康」という語の創始者について．医譚 2011；94: 6395–6415

この『夜船閑話』の序の作者「窮乏庵主飢凍」について，仏教学者の紀野一義氏は，『名僧列伝（二）良寛・盤珪・鈴木正三・白隠』，講談社学術文庫，1999. の「白隠」のところで，白隠自身のことである，と記している．また高山峻は『白隠禅師闘病録　夜船閑話』，大法輪閣，1943，p. 24 で，白隠の別号である，ととらえている．白隠の『寒山詩闡提記聞』の序に窮乏道士が，さらに漢語録『毒爪牙』にも窮乏庵主が登場する．

10）白隠の健康法に関する研究には，直木公彦．白隠禅師―健康と逸話．東京：日本教文社；1979．伊豆山格堂．白隠禅師―夜船閑話．東京：春秋社；1983．荒井荒雄．夜船閑話―白隠禅による健康法．東京：大蔵出版；1996．おおいみつる．白隠ものがたり―夜船閑話に寄せて．東京：春秋社；2005．徳田泰伸．『夜船閑話』に見る白隠禅師の健康観について．兵庫大学論集 2005；第 10 号：187–195 などがある．

白隠の医学に関する研究には，新村拓．日本仏教の医療史．東京：法政大学出版局；2013. に「調息法と道三流医学を修めた白隠」の項目がある．また医師による著作では，長谷川卯三郎．新医学禅．大阪：創元社；1964．村木弘昌．白隠の丹田呼吸法―『夜船閑話』の健康法に学ぶ．東京：春秋社；2003．高山峻．白隠禅師闘病録 夜船閑話．東京：大法輪閣；1943，などがある．

白隠の看病に関する研究には，拙稿．女性信者への書簡『お察に興ふ』（1737）にみる白隠禅師の看病観．仏教看護・ビハーラ 2016；第 11 号：199–188 がある．

11）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注．白隠禅師法語全集．全 14 冊．京都：禅文化研究所；1999–2002. 別冊として，総合索引．2003. がある．

12）白隠和尚の著作は，白隠和尚全集編纂会．白隠和尚全集．全 6 巻．京都：龍吟社；1934. にまとめられている．編集は妙心寺関係者が主．

13）芳澤勝弘．白隠―禅画の世界．東京：中公新書（1799）；2005．本書は 2016 年に角川ソフィア文庫として再発刊されている．

白隠の年譜に関しては種々あるが，芳澤勝弘，山下裕二監修．白隠―衆生本来仏なり．東京：別冊太陽日本のこころ 203 平凡社；2013．pp. 162–165，にあるものを参考にした．近年では芳澤勝弘編注．新編白隠禅師年譜．京都：禅文化研究所；2016. がある．

白隠の著作については，花園大学国際禅学研究所のホームページに，「電子達磨」というデータベースがある．ここには「白隠学」の部門があり，白隠の主要な著作が電子化されている．

白隠の生涯に関する著作には，大崎龍淵．白隠禅師伝（教界偉人叢書第 5 編）．東京：文明社；1904. や山本勇夫．白隠禅師（高僧名著選集 11）．東京：平凡社；1934. などがある．また近年では，高橋敏．白隠―江戸の社会変革者（岩波現代全書）．東京：岩波書店；2014. がある．

14）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注．於仁安佐美（おにあざみ），巻之上・巻之下．禅文化研究所編．白隠禅師法語全集（第 2 冊）．京都：禅文化研究所；1999．p. 161

15）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，14）に同じ，p. 170

16）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，14）に同じ，p. 172

17）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，14）に同じ，p. 265

18）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注．隻手音声（せきしゅおんじょう）・三教一致（さんきょういっち）の弁（べん）・寶鏡窟之記（ほうきょうくつのき）．禅文化研究所編．白隠禅師法語全集（第 12 冊）．京都：禅文化研究所；2001．p. 31

19）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注．辺鄙以知吾（へびいちご）・壁訴訟（かべそしょう）．禅文化研究所編．白隠禅師法語全集（第 1 冊）．京都：禅文化研究所；1999．p. 82

20）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，18）に同じ，p. 143

21）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，18）に同じ，p. 147

22）伊豆山格堂．白隠禅師―夜船閑話．東京：春秋社；1983．p. 113

23）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注．夜船閑話（やせんかんな）・夜船閑話（やせんかんな）巻第二．禅文化研究所編．白隠禅師法語全集（第 4 冊）．京都：禅文化研究所；2000．p. 162.

24）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，23）に同じ，p. 89　本書に収録されている『夜船閑話』は白隠の自筆本で京都法輪寺所蔵によるものである．宝暦 7 年に京都の小川源兵衛から刊行された『夜船閑話』

の丁数とは異なるので注意を要する．宝暦7年版では序六丁ウとなる．

25）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，23）に同じ，p. 93　宝暦7年版では序八丁オとなる．

26）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注．仮名葎（かなむぐら）巻一（新談義）・仮名葎（かなむぐら）巻二（辻談義）．禅文化研究所編．白隠禅師法語全集（第10冊）．京都：禅文化研究所．2000．p. 138

27）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注．さし藻草（もぐさ）・御垣守（かきもり）．禅文化研究所編．白隠禅師法語全集（第8冊）．京都：禅文化研究所；2000．p. 101

28）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，荊叢毒藥（乾・坤）：京都：禅文化研究所；2015．「毒爪牙」は同書の坤に荊叢毒藥拾遺別丁｛430-3｝毒爪牙（宝暦12年，78歳）として，pp. 948–958に原文，読み下し文，訳文が掲載されている．なお，本書は早稲田大学古典籍データベースより，白隠，荊叢毒藥拾遺，付録「毒爪牙」でインターネット公開されている．

29）毒爪牙，白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，荊叢毒藥（坤）：京都：禅文化研究所；2015．「毒爪牙」のp. 955.

30）毒爪牙，白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，29）に同じ，p. 956

31）毒爪牙，白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，29）に同じ，pp. 958–957

32）井上辰雄監修．日本難字異体字大事典編集員会編．日本難字異体字大事典（文字編）．東京：遊子館；2012．p. 17．有賀要延編．難字・異体字典（新装）．東京：国書刊行会；2011，のp. 16「人部」には2種類の異体字が掲載されており，そのなかに上記と同じ「ぎょうにんべん」の「健」の字がある．

33）佐藤武義編．日本語大事典（上）．東京：朝倉書店；2014．p. 74「異体字」の項目参照．その他，異体字に関しては，飛田良文他編．日本語学研究事典．東京：明治書院；2007. の「異体字」（pp. 121–122）も参考になる．

34）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注．壁生草（いつまでぐさ）・幼稚物語（ものがたり）．禅文化研究所編．白隠禅師法語全集（第3冊）．京都：禅文化研究所；1999．p. 380　壁生草（いつまでぐさ）の解説によると，白隠は自分の原稿を二人の侍者に清書させたとある．p. 336

35）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注．遠羅天釜（おらてがま）　巻之上・巻之中・巻之下・続集．禅文化研究所編．白隠禅師法語全集（第9冊），2001「心身堅剛（ケンコウ）に気力丈夫にして」（p. 189），「歯牙轉堅剛（シゲウタたケンコウ）なり」（p. 192）とある．しかし，森江英二編．白隠禅師法語録．東京：森江書店；1940，17刷（1922年発行）．所収の『遠羅天釜』によると，同箇所は「堅剛」となっており，「剛」の字のふりがなは濁音表記となっている．

36）野村瑞城．白隠と夜船閑話．京都：人文書院；1926．p. 32

37）青木純一・北野与一，8）に同じ，pp. 3–5

38）鎌田茂．『猿法語』の世界．小林圓照編．禅と身心論，（叢書　禅と日本文化第7巻）．東京：ぺりかん社；2001．pp. 113–141, pp. 195–196参照．

39）山田真隆．庶民に説いた白隠の教え．特集白隠―その人と禅．大法輪2016；83(5): 92–95.

40）鈴木大拙．白隠和尚は真の意味の教育者である．正法論1934；第794号．鈴木大拙全集（第32），東京：岩波書店；2002．pp. 89–92

41）秋月龍珉．白隠禅師（講談社現代新書790）．東京：講談社；1985．本書226頁は「願心のほとばしる著作の数々」となっている．本書は秋月龍珉．白隠禅師―仏を求めて仏に迷い．東京：河出文庫；2013. で文庫化された．

42）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，19）に同じ，p. 82

43）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，23）に同じ，pp. 161–162

44）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，27）に同じ，pp. 89–98

45）これらの禅画は，芳澤勝弘，白隠禅画の教え（日めくり），東京美術2016．に掲載されているものを参照した．『お婆々どの粉引歌』は白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，粉引歌・ちょぼくれほか．禅文化研究所編．白隠禅師法語全集（第13冊）．京都：禅文化研究所；2000. 参照．なお，「壽」を「いのちながし」と読むことについては，『辺鄙以知吾（へびいちご）』巻之下に「かの仁者は壽（イノチナガ）しと云へる本文に少しも違わず」（50丁ウ）の文章で使用されている．この「仁者は壽（イノチナガ）し」の出典は『論語』（雍也）の「知者動，仁者静，知者楽，仁者壽」とされる．

白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注．20）に同じ，pp. 186–167参照．近年，白隠禅師の書画に対して，芳澤勝弘監修．白隠禅画墨蹟（禅画編・墨蹟編）．東京：二玄社；2009が出版され，白隠作品のほとんどを網羅している．

46）住谷瓜頂．白隠が勧める『延命十句観音経』全訳・解説．特集白隠―その人と禅．大法輪2016；83(5): 120–125

47）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注．荊叢毒藥（乾・坤）：京都：禅文化研究所；2015．早稲田大学古典籍データベースより，白隠，荊叢毒藥拾遺，付録「毒爪牙」で，インターネット公開されている．

48）芳澤勝弘・神野恭行・西村恵学共編．総合索引．禅文化研究所編．白隠禅師法語全集（別冊），京都：禅文化研究所；2003．なお今回研究の対象とした「健康」は「語彙索引」に取り上げられていない．

49）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，19）に同じ，p. 82

50）白隠慧鶴禅師原著．芳澤勝弘訳注，14）に同じ，p. 114

51）黒田日出男監修．図説日本史通覧．東京：帝国書院；2015．p. 181
52）高橋敏．白隠―江戸の社会変革者（岩波現代全書）．東京：岩波書店；2014．第4章は「宝暦・明和期の白隠」となっている．pp. 83–118　高橋氏は歴史学者である．
53）佐藤亨．現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典．東京，明治書院；2007．「健康」の項目，p. 258
54）荒川清秀．「健康」の語源をめぐって．文学・語学 2003；通号 116: 72–82 参照．
　なお竹中憲一は「中国語と日本語における字順の逆転現象」という論考の小項目「逆転現象の歴史的変遷について」で，「健康」「康健」は『波留麻和解』（1796）にみられ，「具体例の検討」として「健康」「康健」を取り上げて解説している．竹中憲一．中国語と日本語における字順の逆転現象．日本語学 1988；7（10）: 55–64
55）山本博文．日本史の一級史料（光文社新書）．東京：光文社；2006．東京大学史料編纂所のデータベースについての紹介がある．
56）健康理学．抱道英口授．書写年不明．（著者）アントニウス・ボードウィン．東京大学総合図書館（土肥慶三の鶚軒文庫）所蔵．表紙の書名は抱氏人身窮理書となっている．同図書館にはもう1冊「抱氏健康理学」（多納鉄蔵訳）という和書がある．こちらは朱墨書入れがあり，「医学校」の印記がある．ボードウィンは明治3年7月に大学東校で3ケ月講義をしており，そのときの講義ノートと思われる．
　ボードィンはオランダの軍医，ポンペの後任として長崎養生所の教頭となる．幕府に医学校の設立を提言，1866年その準備のため留学生を伴って帰国，1867年に再来日し，新政府に同様の提言を行う．大阪陸軍病院や大学東校で教鞭をとった．1870年に帰国．ボードウィンについては，相川忠臣．ボードウィン―眼科・生理学にすぐれたオランダ人医師．ミヒェル他編．九州の蘭学―越境と交流．京都：思文閣出版；2011（初刷 2009）．pp. 311–316 が参考になる．
　『健康理学』の存在については，鹿野政直．健康の時代．東京：朝日選書；2001. で紹介はされているが，実際の閲覧は行われていない．
57）『古事類苑』は明治政府により編纂が始められた類書（百科事典）である．1896–1914年に刊行された．日本の古代から慶応3年までの様々な文献から引用した例証を分野別に編纂しており，日本史研究の基礎資料とされている．日本最大にして唯一の官撰百科事典である．洋装本は1908–1930年に51冊で刊行された．戦後2度，吉川弘文館により復刻されている．
58）中村幸彦・阪倉篤義・岡見正雄．角川古語大辞典（全5巻）．東京：角川書店；1999.
59）望月信亨．望月仏教大辞典．第1巻（ア―ケ）．京都：世界聖典刊行協会；1954.
　「健康」で仏教新脩大蔵経のテキストデータベースを検索すると『続伝燈録』『法苑珠林』が検索されるが，原文は「建康」で，これは地名であり南京市の古称である．また電子仏教事典では宇井伯寿『仏教辞典』，横井雄峯『日英禅語辞典』で検索されるが，いずれも「建康」で江寧，金陵に同じという解説があり，これらは南京の古称である．なおこれらの仏教辞典に関しては岩間真知子氏にご教示いただいた．
60）国書総目録，p. 774「夜船閑話」の項目参照．国書総目録は古代から慶応3年までの間に日本人により著述・編纂・翻訳された書籍の所蔵先をまとめた岩波書店発行の目録である．江戸期に刊行された『夜船閑話』の所蔵館は全国で26箇所となっている．なお明治以降も『夜船閑話』は発刊され続け，大正11年までに全集や叢書の形での出版されたものは14冊，呼吸法や法語録としてのものは7冊ある．『夜船閑話』の単行本は明治29，39，大正4，昭和8，32年の5回，『藪柑子・夜船閑話』としての発行が1回行われ，これらのことから江戸期以降も明治・大正・昭和を通じて根強い人気があることがわかる．
　早稲田大学古典籍総合データベースには5冊の『夜船閑話』（宝暦7年版3冊，明治19年版2冊，序の有無がみられる）が掲載され，インターネット公開されている．
61）禅学大辞典編纂所編．新版禅学大辞典．新版第6刷．東京：大修館書店；2000．p. 49
62）高橋敏．白隠―江戸の社会変革者（岩波現代全書）．東京：岩波書店；2014．第5章は「鵠林教団の形成」となっている．pp. 119–144
63）良寛著．内山知也他編．定本良寛全集（第3巻）．東京：中央公論社；2007．pp. 200–201　国際禅学研究所芳澤勝弘氏のご教示による．
64）渡邊義行．江戸時代僧侶の行脚距離に関する研究―白隠和尚が歩いた距離．教育医学 2009；第3号：227–231
65）渡邊義行，64）に同じ，p. 220
66）田中聡．健康法と癒しの社会史．東京：青弓社；1996．p. 51 に，白隠の書は呼吸的健康法の思想の原点となる，とある．
67）平田篤胤．静乃石室（上・下巻）．富士川游等編．杏林叢書（巻三）．東京：吐鳳堂；1924．本書はインターネットで公開されている．同書は文化8年の書で，一名を『医道大全』ともいい，平田篤胤の神道に基づく医学論である．下巻の末尾ちかく（pp. 295–296）に白隠の夜船閑話の話がでてくる．
68）吉田麻子．平田篤胤―交響する死者・生者・神々（平凡社新書）．東京：平凡社；2016．p. 188
69）鎌田茂雄．白隠禅師の調息法及びその継承と発展．小林圓照編．禅と身心論，（叢書　禅と日本文化第7巻）．東京：ぺりかん社；2001．pp. 113–141．白隠の『夜船閑話』の呼吸法は武道に取り入れられた．白隠

の呼吸法と平田篤胤，武道との関係については第 117 回日本医史学会発表会場で京都大学の武田時昌氏にご教示いただいた（2016.5.21）.
70）富士川游，小川鼎三校注．日本医学史綱要 1．東洋文庫 258．東京：平凡社；1974.
富士川游，小川鼎三校注．日本医学史綱要 2．東洋文庫 262．東京：平凡社；1974.
71）服部敏郎．江戸時代医学史の研究．東京：吉川弘文館；1978．pp. 85–88
72）青木歳幸，江戸時代の医学―名医たちの三百年．東京：吉川弘文館；2012.

Use of the Term *Kenkō* in Hakuin's Buddhist Writings in Japanese: from *Oniazami* (1751) to *Sashimogusa* (1760)

Machiko HIRAO

Health Science University

This article discusses how the term *kenkō* is used by Hakuin Ekaku (1685–1768), a priest of the Rinzai sect of Zen Buddhism in the middle Edo period. The term *kenkō* appears fourteen times in such texts in Japanese (*kana*) as *Oniazami kan-jō* (1751), *Oniazami kan-ge* (1752) *Sekishu-onjō* (1753), *Hebi'ichigo* (1754), *Sankyō-icchi no ben* (1754), *Yasen kanwa kan-ge* (1755), *Yasen kanwa* (1757), *Kanamugura* (1759), and *Sashimo gusa* (1760). In addition, in *Dokusōge* (1758), one of Hakuin's texts written in Chinese (*kanbun*), *kenkō* also appears twice. The examination of these examples suggests that the term *kenkō* is not only used to refer to the healthy state of one's body and mind, which is similar to the meaning of today, but sometimes it also indicates 'land' and 'nation'. This research concludes that the first appearance of the term *kenkō* in Japan seems to date back to 1751.

Key words: Hakuin the Buddhist, Buddhist writing in Japanese (*kana*), *kenkō*, Edo period, *Oniazami*